

# 人物で語る 日本デンマーク

②3

## 太田功平

太田功平は、菜種（芸薹）の多収穫種として知られた「六ツ美種」の育成に尽力した人物である。

太田は、一八九三年（明治二六年）、現在の岡崎市土井町に生まれた。地元の高等科から進学した愛知第二師範学校を卒業し、碧海郡の各小学校などを経て、一九二七年（昭和二年）、長谷川一男校長に招かれて、六ツ美村立農業補習学校の教頭として勤務することになった。

太田は、農村を豊かにするために、農地の有効利用を図ることが重要であると考えた。その実現のため、二毛作の裏作を担う菜種の研究に同僚とともに取り組んだ。当時、菜種の収穫量は、反当たり一石程度であった。太田らは、菜種の増収をめざし、文献の調査を行った。それと同時に、種子の選定をはじめとして、育苗や移植法などについて生徒や農家の人たちと実験を重ね、栽培法の研究を進めた。こうした努力によって、六ツ美の菜種

の収穫量は、一層増加していった。

一九二八年（昭和三年）ごろ、全国の製油会社は、菜種を生産者から購入し、菜種油の増産に力を入れていた。大阪の由原製油会社が六ツ美に菜種を買い付けに来た時、農業補習学校の太田たちの菜種研究に注目して援助を約束した。ここで太田らはこの資金によってさらに栽培方法の研究をすすめ、その成果を『芸薹調査』としてまとめ、改良品種の六ツ美種を世に紹介した。

この新品种によって、菜種の収穫量が従来の上ととなり、反当たり約二石二斗に増加したという（『六ツ美風土記』より）。山崎延吉が提唱していた多角形農業の一環としての菜種栽培は、麦作と比べて沖積地の水田の裏作に優れ、安城地域にも広まった。



昭和48年2月18日  
発行

このことについて「時恰も不況時代で農村は、菜種栽培にかける期待は非常なものだ。全国からの視察者が引きもきらぬ毎日であった。」という（六ツ美中部小学校記念誌『わが校のあゆみ』より）。

一方、太田は、新しい六ツ美種について、各地で講演していた。この菜種の増収は高く評価され、「六ツ美の菜種が菜種の六ツ美か」

といわれるほどになったが、太田は一九三〇年（昭和五年）十二月四日、鉄道事故で生涯を閉じた。三十七歳であった。

太田について、「交通事故で亡くなったがもう少し長く生きておられたら菜種で博士の学位を取られる程の実績を挙げておられたと聞く。…学校

長は職員の研究業績を集めて著書も出した。」

（『わが校のあゆみ』より）。太田たちの菜種の

研究をまとめたこの著書は、山崎延吉の序が見られる『菜種栽培之研究』校訂岩槻信治、著者長谷川一男、昭和一〇年九月発行）である。



長谷川一男校長（写真右）と太田功平教頭

太田の勤務した六ツ美村立農業補習学校は、現在、岡崎市立六ツ美中部小学校になっている。同校は、平成一五年二月に開校百三十周年を迎える。昭和三十年制定の校歌には、「菜の花のさきさききき悠紀のほまれのゆかしきところ」と詠まれている。今ここに学ぶ児童たちは、咲き誇っていた菜の花畑の情景を想いながら、太田功平先生の業績をたたえて、この校歌に親しんでいる。

文 尾関文啓